

明治期日本における流通構造の変容と海運業者

—野坂家と白銀家の事例—

中 西 聡

慶應義塾大学教授

I はじめに

近代期の日本海運市場は、帆船による買積形態から汽船による運賃積形態への転換として語られることが多い。買積形態とは、船主が自己所有船である港で買い入れた積荷を別の港に運んで販売する自己荷物輸送を意味する。一方、運賃積形態とは、船主が荷主から運賃を受け取ってある港から別の港へ輸送する形態で、他人荷物輸送を意味する。買積形態から運賃積形態への転換は、輸送業と商業の未分離な状態から輸送業が商業から分離される状態へと変わることを意味し、それが帆船から汽船への輸送技術の転換と組み合わせられて生じたことが、海運業の近代化と位置付けられた（佐々木，1961；小風，1995，など）。大枠では、その流れで捉えることはできようが、大型汽船は、中小の港湾に入港することは難しく、汽船網の発達で、汽船の寄港地である地域の中核港とその周辺の港を結ぶ帆船輸送需要を拡大させたこともあり、帆船買積形態がすぐに汽船運賃積にとって代わられたわけではなかった（中西，1995）。むしろ、鉄道網の整備がそうした地回りの海運需要に代替した場合もあり、鉄道輸送と汽船輸送の組み合わせで帆船輸送が衰退した地域もあったが、明治期の鉄道網の整備にはかなり地域差があり、鉄道網の整備が遅れた地域では、20世紀に入っても帆船買積輸送が根強く残った地域が存在した（中西，2009）。

本稿は、近世期に北前船輸送の拠点港であった青森県野辺地港を事例として、遠隔地間の帆船輸送が汽船輸送に代替された後に、いかに帆船輸送業者が経営を展開したか、そして、それによりどのような地域経済圏が新たに形成されたかを論ずる。北前船とは、19世紀の日本海航路で活躍した商人船主の船を表し、近世後期の日本における帆船買積経営の典型例とされた（牧野，1989など）。なお、野辺地では1891（明治24）年に日本鉄道が開通して、鉄道で青森や東京方面とつながったが、対岸の北海道との間は、鉄道連絡航路の開設が遅れ¹⁾、海運需要が根強く残った。また、近世期の野辺地湊は盛岡藩の外湊として野辺地の御用商人が御用品の集荷も担い²⁾、同港を取り上げるこ

で、近世期の地域拠点湊の、近代期の輸送網の近代化のなかでの役割変化も論じることができる。

近世期の野辺地湊の主要な北前船主で、近代期も野辺地地域最大の資産家になったのは、野村治三郎家であるが、野村家の北前船経営については既に中西聡が論じており、同家廻船が近世期は、主に畿内の木綿を野辺地地域に運んで販売し、地元産の大豆・魚肥を畿内に運んで販売していたこと、および近代に入り北海道市場の開拓が進み、魚肥生産が拡大すると、野村家廻船が北海道へ進出して、北海道産魚肥を畿内に運んで販売するようになったことが明らかにされた（中西，2009，第3章）。本稿では、野村家ではなく、野村家と並ぶ有力な野辺地の海運業者であった野坂家を取り上げる。野村家が近代期に銀行を設立して野辺地産物の取引から次第に離れたのに対し（中西，2019，第9章）、近世期に酒造業を行っていた野坂家は近代期に味噌・醤油醸造に進出して、近代期も野辺地産物の移出に大きく関わった。その意味で、野辺地港の変容を考えるには、野村家よりも野坂家がより相応しいと考えられる。ただし、野坂家は醸造業を近代以降も長年継続したものの、海運経営から19世紀末に撤退しており、その後の地廻り海運の担い手となったのは、野辺地の白銀家であった。よって本稿は、野坂家と白銀家を分析対象とする。

本論に入る前に、野坂家の歴史を概観する³⁾。野坂家は野辺地でかなり古い家柄で、野坂勘左衛門家（△）と野坂與次兵衛家（△）が存在していた。このうち勘左衛門家は18世紀前半から酒造業を営むとともに遠隔地間の商売を行っており、その範囲は、盛岡藩城下から青森湊、そして日本海沿岸の酒田まで及んでいた⁴⁾。その後、18世紀中葉には廻船業を兼営し、自らの船で遠隔地間取引に乗り出し、盛岡藩の大坂御仕送御用達となった。そのため野坂家は多額の御用金を盛岡藩に上納し⁵⁾、盛岡藩御用商人のなかでかなり有力な地位を占め、1835（天保6）年頃の盛岡藩の分限者見立番付で、野坂勘左衛門は勸進元世話役に挙げられた⁶⁾。その見立番付で野村治三郎も西関脇に挙げられたが、天保期までの野辺地では、おそらく野坂勘左衛門家が最大の分限者であった。

なお、野坂勘左衛門家と野村治三郎家は⁷⁾、8代勘左衛門の姉妹のいずれかがおそらく19世紀前半に5代野村治三郎の妻となり、明治期に11代勘左衛門の娘が8代野村治三郎に嫁いでおり、強い姻戚関係にあった。最幕末期の野坂家当主は、9代勘左衛門であり、その息子のうち兄の富三郎が10代目として勘左衛門家を継ぎ、弟の常吉が分家して野坂常吉家（△）を立てて1879年頃から醤油醸造を開始した。本家では10代勘左衛門が1884年に死去してその息子の11代勘左衛門が後を継いだ⁸⁾。なお、8代野村治三郎の父である7代治三郎は、野村家分家の新八郎家から治三郎家に養子に入っており、7代治三郎の姉妹のいずれかが野坂與次兵衛家から婿を迎えて新八郎家を継いだため、明治期野辺地の有力な味噌醤油醸造家の野坂常吉家・野村新八郎家・野坂與次兵衛家は、野村治三郎家を挟んだ姻戚関係にあった。また、野坂本家の勘左衛門家と野村本家の治三郎家はそれぞれ酒造業を近世期から行っており⁹⁾、野坂一族と野村一族ともに明治期になって味噌醤油醸造へも進出して醸造経営の多角化を図った。

野辺地町の主要商工業者を営業税額から見ると、1898年頃は野村治三郎家が約250円で飛びぬけて大きく、野坂勘左衛門家約81円、伊藤福平家約46円、中村久治家約45円、野村新八郎家約

40 円、杉山久之丞家約 36 円、野坂常吉家約 34 円、松本彦蔵家約 27 円の順であった（渋谷編，1995a）。これらの家はいずれも醸造業を営業しており、野村治三郎家と野坂勘左衛門家は酒造業、それ以外の家はいずれも味噌醤油醸造業を営んでいた。1912（大正元）年頃の野辺地町の主要商工業者の営業税額を見ると、野村治三郎家と野村新八郎家は不明で、杉山久之丞家が約 121 円、伊藤福平家が約 113 円と大きく、野坂勘左衛門家約 96 円、中村久治家約 88 円、野坂常吉家（野坂常七）約 77 円、野坂醤油製造合資会社約 70 円の順であった（渋谷編，1995a）。杉山家と伊藤家は、3 代伊藤福平が 3 代杉山久之丞の娘を娶り、3 代福平の姉が 4 代久之丞に嫁いだことで強い姻戚関係を結んだ（伊藤，2017）。1897 年時点の野辺地の有力地主は、野村治三郎家・野村新八郎家・伊藤福平家・野坂勘左衛門家・杉山久之丞家の順であったが¹⁰⁾、野辺地の資産家は、野村・野坂系列と伊藤・杉山系列に大きく分かれ、5 家ともに酒造業か味噌醤油醸造業を展開していた。なお、野坂與次兵衛家は家業の味噌醤油醸造を野坂醤油製造合資会社という会社組織にしており（渋谷編，1995b，127 頁）、前述の 1912 年の営業税額から見て中村久治家・野坂常吉家と同程度の経営規模であったと考えられる。後述するように野坂勘左衛門家も、味噌醸造を始め、松本彦蔵家も合わせて明治期野辺地では 8 軒の味噌醤油醸造家が存在しており、味噌醤油醸造産地を形成した。

それに比べて白銀家の規模は小さく、明治前期から 2 隻の和船を所有して主に野辺地―北海道間の廻漕業を行った¹¹⁾。白銀家の北海道での拠点は函館にあり、当主甚之助の弟の竹次郎が函館に分家して店を構えたと思われる。白銀家の廻漕業は、運賃積が中心であったが、自ら積荷を買い取って販売した部分もあり、竹次郎の店がそれを担当したと考えられる。

Ⅱ 1870 年代の野辺地港をめぐる物流と野坂家

近代初頭の 1870 年代の野坂勘左衛門家の廻船の動きを表 1 で確認する。この時期の野坂家廻船は、松尾丸と嘉宝丸の 2 隻であったが、そのうちの松尾丸の売仕切状を示した。売仕切・買仕切はそれぞれ売買内容を示す証文として、販売者が売仕切を、買入者が買仕切を所持するが、その内容から、松尾丸がどの港で誰に何を販売したかが判明する。1870 年代の主な販売相手は大阪商人および大阪府貝塚港の廣海惣太郎家であり、販売商品は地元（南部）産魚肥（メ粕）と地元産大豆であった。この時点では、松尾丸は野辺地で地元産魚肥・大豆を積み込み、それを畿内へ運んで販売しており、近世期と同様の廻船経営を行っていた。特に、貝塚港の荷受問屋廣海惣太郎家との継続的取引は着目すべきで¹²⁾、幕末期から取引が続き、野坂家は大阪湾岸での活動を行いやすくするため、1880 年代後半に野坂勘左衛門所有船の嘉宝丸の登記上の所有者に貝塚の廣海家になってもらっていた¹³⁾。野村治三郎家廻船も、1870 年代は野坂家廻船以上に貝塚の廣海惣太郎家と継続的取引を行っており、主に地元産魚肥や地元産大豆を販売していたので¹⁴⁾、1870 年代の野辺地港は、幕末期と同様に魚肥・大豆の遠隔地向け移出港としての性格をもっていたと考えられる。

津軽海峡対岸の函館は、幕末に開港場となったこともあり、定期汽船網が早くから定着し、1884（明治 17）年の大阪商船、85 年の日本郵船の設立で国内定期汽船網が整備されたことにより、85 年

表 1 1970～76 年松尾丸の売仕切状

年月日	販売先	場 所	商 品	金 額
1870・閏10・29	廣海惣太郎	貝塚	市川粕・田名部粕・鯡魚肥	5,976 両
1871・6・21	廣海惣太郎	貝塚	市川粕	3,208 両
1871・6 月	薩摩屋嘉助	大阪	南部干鮑・するめ	323 両
1871・6 月	嶋屋重治郎	大阪	南部長折・南部大豆・南部粕	1,089 両
1871・6・晦	北国屋長右衛門		南部大豆	1,121 両
1873・6・23	網屋三郎兵衛	赤間関	南部大豆	331 両
1873・6・23	豊後屋繁蔵	赤間関	南部大豆	348 両
1873・7・24	廣海惣太郎	貝塚	市川粕	1,327 円
1873・7・25	植島嘉助・丸須武助	大阪	南部大豆	1,487 円
1873・7・26	嶋谷重治郎	大阪	南部市川粕	2,576 円
1873・7 月	藤野熊蔵	大阪	南部市川粕	311 円
1874・7・23	嶋谷重治郎	大阪	南部大豆	1,542 円
1874・7・29	日下治兵衛	大阪	南部鰯粕	1,296 円
1874・8・1	嶋谷重治郎	大阪	南部鰯粕	426 円
1874・8・3	藤野熊蔵	大阪	南部市川鰯粕	582 円
1874・8・4	植島嘉助・丸須武助	大阪	南部市川粕・南部花折	2,130 円
1875・4・17	嶋谷重治郎	大阪	南部大豆	784 円
1875・4・21, 26	丸須武助	大阪	南部大豆・津軽古米	2,110 円
1875・4 月	藤野熊蔵	大阪	南部市川粕	1,263 円
1875・4・30	植島嘉助	大阪	南部花折・南部大豆	1,747 円
1875・10・9, 21	廣海惣太郎	貝塚	津軽米・市川粕	3,919 円
1875・10 月	藤野熊蔵・植島嘉助	大阪	南部大豆	2,394 円
1876・6・13	網屋三郎兵衛	赤間関	南部大豆	800 円
1876・7・7	嶋谷重治郎	大阪	南部大豆	621 円
1876・7・13	木下長右衛門・喜多伊兵衛	兵庫	南部花折昆布	1,001 円
1876・7・15	木谷善太郎	大阪	南部粕	750 円
1876・7・15	鈴木善太郎	大阪	南部粕	771 円
1876・7 月	藤野熊蔵	大阪	南部鰯粕	3,201 円

(注) 金額は両・円未満を四捨五入。300 両もしくは 300 円以上の仕切金額のものを示した。この表の仕切状は野坂勘左衛門家に残されたもの。

(出所) 野辺地町史編さん刊行委員会編 (1993, 1997a) より作成。

以降函館港の移出入額は急増し、函館の人口も、1879 年約 26,000 人、86 年約 44,000 人、1901 年約 85,000 人と増大した¹⁵⁾。青森県側では、青森港は函館港と定期航路が開かれたが、他の港への汽船入港はほとんどなく、個々の港が帆船買積輸送を通して遠隔地の市場とつながっていた。1879 年の「東北諸港報告書」では、当時の野辺地港の定繋船は西洋型風帆船 2 艘を合わせて合計 31 艘で、西洋型風帆船 2 艘と 300 石積以下の和船 21 艘は北海道との間を主に航海し、1 カ年に 4～6 往復、函館・寿都・小樽等と野辺地を結び、船荷仲買は 6 軒あり、他の地域からの入港船は船荷仲買を頼って積荷を青森県下・岩手県下に販売したとされた¹⁶⁾。さらに同資料での 1879 年の野辺地港への入港は、汽船 2 艘、西洋型風帆船 4 艘、50 石積以上の和船 97 艘、50 石積以下の和船 36 艘とされ、77 年の野辺地港への主要移入品は、木綿 (約 26,282 円)・身欠鯨 (22,750 円)・古綿 (約 10,514 円) の順で、野辺地港からの主要移出品は、大豆 (39,000 円)・味噌 (5,040 円)・煙草 (4,675 円) の順であった¹⁷⁾。当時の野辺地港は、大豆の移出港および木綿類の移入港としての性格が強いが、大豆を原料とする味噌の製造が増え、味噌の移出が見られ始めた。野辺地産の味噌は「南部味噌」

表 2 野辺地港主要移出入品の動向

(単位：円)

1882 年				1899 年				1906 年					
移 出	金 額	移 入	金 額	移 出	金 額	移 入	金 額	移 出	仕向地	金 額	移 入	仕向地	金 額
大豆	37,477	木綿	41,256	味噌	68,640	食塩	35,640	味噌	北海道	56,250	食塩	三田尻	19,285
馬	14,403	身欠鯨	16,600		(31万貫)	身欠鯨	13,464			(113万斤)	生鯨	北海道	8,100
味噌	12,144	古着	14,692	柿	4,800	生鯨	12,000	枕木	東京	18,000	精米	新潟	7,612
身欠鯨	6,509	蓆	7,524	醤油	4,560	塩鮭	9,750	醤油	北海道	9,000	身欠鯨	北海道	6,750
醤油	5,457	塩鮭	6,297		(380石)	塩鱒	5,700			(450石)	石油	函館	6,383
鰯メ粕	4,089	塩	6,128	鰯粕	3,480	石油	5,365	精米	北海道	5,856	紙	大阪	3,500
鶏卵	3,261	砂糖	4,203			焼酎	4,092	樹皮	北海道	4,200			
蓆	3,244	塩鱒	3,261			清酒	3,744	大豆	大阪	4,050			
その他とも計	101,514	その他とも計	123,008	その他とも計	97,367	その他とも計	103,841	その他とも計		101,776	その他とも計		76,951

(注) 移出入額がそれぞれ 3,000 円以上の品物を示した。1899・1906 年の味噌・醤油については、移出量を括弧書きで付記した。
金額は円未満を四捨五入。

(出所) 商品流通史研究会編 (1978, 1979b) より作成。

と呼ばれ、1865（慶応元）年に野辺地の西村金七郎が初めて製造したが、利益が少ないために製造を中止し、76 年から伊藤福平が味噌製造を始めて北海道へ移出したとされる¹⁸⁾。野辺地の味噌は、地元産の原料を利用して近代以降に製造が開始された特産物と言える。

Ⅲ 1880 年代の流通構造の変容と野坂家・白銀家

表 2 を見よう。1882（明治 15）年時点の野辺地港は、77 年と同様に大豆の移出が多く、味噌の移出額が増大するとともに、馬の移出も多かった。旧盛岡藩領域は馬の産地で、野辺地のあった上北郡も近代以降、軍馬改良のために馬産奨励が行われた¹⁹⁾。主要移出入品は、木綿・古着・海産物が多く、身欠鯨は、鯨を食料用に加工したもので、鯨・鮭・鱒ともに北海道が産地であったので、北海道からの食用海産物の移入が多く、身欠鯨は野辺地から近隣の港に再移出されたと考えられる。一方、鰯メ粕は魚肥で、鰯は野辺地地方で近世期から漁獲されており、地元産魚肥と考えられる。木綿類の移入港、地元産大豆・魚肥の移出港としては、近世期の野辺地湊の性格と同様であったが、北海道から食用海産物がかなり移入されるようになり、地元産大豆を原料とする味噌・醤油などの醸造品の移出が近世期と異なって見られた。

野坂勘左衛門家所有船の松尾丸の運航状況を表 3 より検討する。この表では、表 1 と同様に松尾丸の仕切状を示したが、大阪府貝塚の廣海惣太郎家との取引が見られない。しかし、廣海惣太郎家文書によれば、1880 年代も廣海家と野坂勘左衛門家との取引は継続しており²⁰⁾、実際、野坂勘左衛門家勘定目録の年度末預置荷物勘定では、廣海惣太郎家への預置荷物が、87 年度に 2,500 円（松尾丸・嘉宝丸揚置荷物引当）、88 年度に 850 円（為登荷物当て金）、89 年度に約 1,515 円（苫前粕延売代）、90 年度に約 2,570 円（預け苫前鯿粕）と連年計上されていた²¹⁾。苫前は北海道の地名であり野坂家廻船は北海道産魚肥を廣海家に預けたと考えられる。この間、野坂勘左衛門所有船の松尾丸・嘉宝丸が廣海惣太郎家と取引したが、前述のように 1887～90 年度は嘉宝丸の名義上の所有者が廣海惣太郎家となり、80 年代後半はこれまで以上に野坂勘左衛門家と廣海惣太郎家の関係が深まっ

表 3 1880～89 年松尾丸仕切状

年月日	買入先	場 所	商 品	金 額	年月日	販売先	場 所	商 品	金 額
1880・7・9	(廣海惣太郎)	貝塚	生姜 25 俵	33 円 23	1880・7・11	木下長右衛門	兵庫	小豆 63 匁	148 円 74
					1880・8 月	伊東善五郎	青森	反物 50 反	106 円
					1880・9・7	五十嵐与兵衛	野辺地	生姜 15 俵	18 円 64
1880・9・27	中嶋清助	田名部	昆布	29 円 52	1880・10・13	網屋三郎兵衛	赤間関	昆布	35 円 30
1881・7・21	島村理兵衛	大阪	筑前蠟燭 5 櫃	58 円 25	1881・7・26	斎藤宇八	大阪	昆布	76 円 11
1882・7・3	島村理兵衛	大阪	筑前蠟燭 6 櫃	55 円 20	1882・2・9	藤井半七	兵庫	昆布	174 円 83
1882・7・14	藤兵衛		栗粕 5 箱	40 円	1882・7・8	太田市郎兵衛	兵庫	昆布 3,000 把	154 円 67
1883・3・17	石屋源助	大阪	石塔 1 本	31 円					
1883・3・28	藤田莊吉	備前日比	塩 250 俵	100 円 95					
1883・7・4	水野万吉	大阪	しら菊 5 櫃	26 円 25	1883・7・1	鹿野長四郎	大阪	市川鯉粕 96 本	233 円 98
1883・7・8	島村理兵衛	大阪	筑前蠟燭 15 櫃	21 円	1883・9 月	伊東善五郎	青森	玉砂糖 7 挺	76 円 14
1883・7・22	藤田莊吉	備前日比	塩 250 俵	86 円 55	1883・12・14	太田市郎兵衛	兵庫	身欠鯨 140 本	129 円 10
1884・3・23	藤田莊吉	備前日比	塩 500 俵	116 円 50					
1884・7・31	藤田莊吉	備前日比	塩 250 俵	53 円 95					
1884・8・5	豊永繁蔵	赤間関	七嶋 50	38 円 50					
1887・3・13	大屋和太次	讃岐坂出	塩 250 俵	70 円					
1887・7・17	水野弥兵衛	大阪	蠟燭 26 函	108 円 56	1887・9・26	中村松右衛門	青森	蠟燭 12 函	58 円 80
1887・7・31	那須三次郎	備前下津井	塩 250 俵	56 円 75	1887・10・10	五十嵐与兵衛	野辺地	蠟燭 14 函	68 円 93
1888・3・3	福井清七	大阪	刃金・鋸	25 円 50	1888・5・17	津山久五郎	江差	醤油 21 樽	10 円 23
1888・3・5	江野弥三兵衛	大阪	輪竹 22 本	52 円 44	1888・5・17	林藤平	江差	みそ 30 樽	36 円 08
1888・3・16	藤田莊吉	備前日比	塩 200 俵	44 円 16	1888・5・23	柴田与兵衛	江差	醤油 60 樽	25 円 92
					1888・5・23	柴田与兵衛	江差	みそ 120 樽ほか	213 円 88
1888・7・15	安藤兼太郎	大阪	(蠟燭) 5 箱	34 円	1888・9 月	岩崎岩次郎	青森	蠟燭 9 函	40 円 85
1888・7・29	水野弥兵衛	大阪	蠟燭 12 箱	95 円 10	1888・9 月	伊東商会	青森	布段 1 個	27 円 23
1888・8・5	小西退蔵	備後尾道	筵敷物	32 円 51	1888・10・8	五十嵐与兵衛	野辺地	抜出綿 5 個	39 円 33
					1888・10・8	五十嵐与兵衛	野辺地	蠟燭 6 函	26 円 46
1889・3・3	江野弥三兵衛	大阪	輪竹 159 本	49 円 07					
1889・3・24	須崎和太次	讃岐坂出	塩 250 俵	55 円 20					
1889・7・11	松尾弥右衛門	大阪	酒袋 200 枚	35 円 93					
1889・7・27	水野弥兵衛	大阪	筑前蠟燭 10 箱	37 円 90					
1889・8・15	須崎和太次	讃岐坂出	塩 200 俵	72 円 12	1889・10 月	岩崎岩次郎	青森	筑前蠟燭 10 箱	43 円
1889・10・11	岩崎岩次郎	青森	米 20 俵	58 円 40	1889・10 月	岩崎岩次郎	青森	玉砂糖 5 櫃	34 円 17

(注) 松尾丸の仕切状で野坂常吉家に残されたもののうち 1880～89 年のなかで買入金額が 20 円以上もしくは販売金額が 10 円以上の取引を示した。そのため松尾丸の取引の全体像を示すものではない。金額の円の右側は銭で銭未満を切り捨て。括弧内は推定で、1880 年 7 月 9 日の生姜 25 俵の取引は出所資料では松尾丸の販売とされたが、その後同年 9 月 7 日に野辺地で生姜 15 俵を販売しているため、7 月 9 日に生姜を松尾丸が買い入れたと考えられる。

(出所) 永峰文男編 (2000) より作成。

た。なお、廣海惣太郎家は荷受問屋であり、基本的には廻船が運んできた積荷を預かり、その販売を委託された手数料を取得したが、積荷を自ら買い取って販売する場合もあった (谷本, 2006)。

野坂家廻船は北海道で買い入れた魚肥を貝塚に運んで、廣海惣太郎家に販売もしくは預置したが、廣海家以外との松尾丸の取引関係を表 3 に戻って確認すると、大阪で主に蠟燭を、日比や坂出で塩を購入しており、このうち蠟燭は青森や野辺地で販売しているが、醤油・味噌を北海道江差で販売したことが興味深い。おそらく、松尾丸は地元野辺地で味噌・醤油を積み込み、それを北海道へ運んで販売し、北海道で魚肥を買い入れてそれを貝塚など大阪湾岸に運んで販売し、大阪や瀬戸内海で蠟燭や塩を買い入れて、青森・野辺地へ戻ってそれらを販売したと考えられる。

表 4 1880～94 年嘉宝丸仕切状

年月日	買入先	場 所	商 品	金 額	年月日	販売先	場 所	商 品	金 額
1880・6・30	南弥七郎	備後鞆	梅印中幅 20 個	80 円 50					
1881・2・28	太田市郎兵衛	兵庫	古酒桶	97 円					
1882・3・23	太田市郎兵衛	兵庫	古桶 5 本	57 円 22	1882・7・15	福田友七	大阪	黒大豆 7 呎	20 円 78
1882・7・1	松尾弥右衛門	大阪	酒袋瓶など	30 円 25	1882・9・26	田中正右衛門	函館	みそ 100 樽	195 円
1883・3・2	村上武助	京都	木綿・羽織ほか	20 円 55					
1883・3・17	太田市郎兵衛	兵庫	古桶 3 本	39 円					
1883・3・27	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	101 円 25					
1883・5・19	中嶋清助	田名部	昆布 500 把	24 円 03	1883・7・13	北伊兵衛	兵庫	昆布 500 把	27 円 30
1883・7・22	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	87 円 30	1883・9 月	五十嵐与兵衛	野辺地	玉砂糖 9 丁	113 円 14
1883・9 月	伊東善五郎	青森	みそ樽 250 個	39 円 10	1883 年	新谷末吉	大湊	醤油 7 樽	10 円 50
1884・3・6	太田市郎兵衛	兵庫	古桶 2 本	21 円					
1884・3・23	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	83 円 75	1884・5・10	五十嵐与兵衛	野辺地	塩 100 俵	36 円 07
1884・7・21	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	51 円 95	1884・11・11	五十嵐与兵衛	野辺地	蠟燭 1 箱	10 円 72
					1886・7・8	柴田与兵衛	江差	醤油 75 樽	48 円 75
1887・3・3	福田友七	大阪	蠟燭 35 個	169 円					
1887・3・16	那須三次郎	備前下津井	塩 250 俵	74 円 75					
1887・7・5	竹田勘兵衛	大阪	玉砂糖 10 挺	62 円 17	1887・9 月	伊東善五郎	青森	玉砂糖 9 挺	68 円 73
1887・7・23	那須三次郎	備前下津井	塩 250 俵	56 円 25	1887・9 月	伊東善五郎	青森	塩 250 俵	77 円 10
1888・3・16	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	55 円 20	1888・7・20	大家三郎	大阪	昆布 744 把	15 円 94
1888・7・26	藤田荘吉	備前日比	塩 250 俵	47 円 70	1888・10・6	湊平次郎	函館	柏木皮 1200 把	27 円 36
					1888・10・7	石澤孫十郎	函館	醤油 120 樽	70 円 18
					1888・10・7	荒川忠蔵	函館	醤油 35 樽	91 円 90
1889・2・26	山本利七	備後尾道	新豊 50 丁	20 円 14	1889・7・17	香井仁三郎		醤油・みそ 11 樽	10 円 34
1889・3・5	江野弥三兵衛	大阪	輪竹 145 本	42 円 25					
1889・3・21	須崎和太治	讃岐坂出	塩 250 俵	55 円 20					
1890・3・1	江野弥三兵衛	大阪	輪竹 116 本	26 円 71	1890・5・13	五十嵐与兵衛	野辺地	豊 50 丁	29 円 25
1890・3・25	須崎和太治	讃岐坂出	塩 250 俵	127 円 75	1890・7・14	藤野弥三兵衛	小樽	みそ 300 樽	565 円 08
					1890・7・18	藤野弥三兵衛	小樽	醤油 114 樽	54 円 72
					1890・7・19	廣沢久治郎	小樽	醤油 254 樽	265 円 92
1891・2・25	江野弥三兵衛	大阪	輪竹 180 本	27 円 60					
1891・3・23	中西辰五郎	備前下津井	塩 250 俵	107 円 50					
1891・7・17	製塩販売所	周防三田尻	塩 250 俵	84 円 42					
1891・8・11	岩崎岩次郎	青森	粃米 10 俵	23 円 38					
1892・2・21	江野市兵衛	大阪	輪竹 102 本	28 円 75					
1892・3・4	須崎和太治	讃岐坂出	塩 250 俵	92 円 75					
1892・7・14	江野市兵衛	大阪	輪竹 170 本	22 円 05					
1892・8・5	西浜塩田会社	周防西浜	塩 250 俵	81 円 25					
1893・3・8	江野市兵衛	大阪	輪竹 295 本	75 円 40					
1893・5・12	野坂常吉	野辺地	みそ 150 樽	300 円	1893・8 月	田中	小樽	みそ 150 樽	227 円 74
1894・4・21	江野市兵衛	大阪	輪竹 25 丸	38 円 30					

(注) 嘉宝丸の仕切状で野坂常吉家に残されたもののうち 1880～94 年のなかで買入金額が 20 円以上もしくは販売金額が 10 円以上の取引を示した。そのため嘉宝丸の取引の全体像を示すものではない。金額の円の右側は銭で銭未満を切り捨て。

(出所) 永峰文男編 (2000) より作成。

同様に嘉宝丸の取引関係も仕切状から判明するので、表 4 に示した。この表でも表 3 と同様に、貝塚の廣海惣太郎家との取引は不明だが、前述の野坂家勘定目録の年度末預置荷物勘定や廣海惣太郎家文書から、嘉宝丸も廣海惣太郎家と継続的に取引していたことが確認できるので、それを加味

すると、嘉宝丸も味噌・醤油を野辺地で買い入れて、それらを函館や小樽で販売し、北海道で買い入れた魚肥を貝塚など大阪湾岸に運んで販売し、大阪で竹などを買入れ、日比・下津井・坂出・三田尻など瀬戸内海地域で塩などを買入れて青森・野辺地に運んで販売していた。このように、野坂家廻船は、近代に入り北海道開発が進んで北海道産魚肥の製造が増えるとともに²²⁾、北海道産魚肥を扱うようになり、野辺地から北海道に赴く際に、地元産味噌・醤油の販売も行った。しかも醤油の原料となる塩の需要が野辺地で生まれたことから、帰り荷として、瀬戸内地域で塩を買入れてそれを野辺地に運んで販売するという三角取引を、野坂家廻船は行うようになった。

ここに分家常吉家の味噌醤油醸造と本家の廻船経営が接続し、地元産大豆に加えて、醤油の製造原料である塩も瀬戸内地域から調達できるに至った。そのこともあり、他の野辺地の醸造家が味噌製造を中心としたのに比べて常吉家の醸造経営では醤油醸造の比重が高く、常吉家の所得金高居によると 1887 年度の醤油所得が 269 円に対して味噌所得は 22 円であった²³⁾。そして 1888 年の常吉家の醤油販売量は青森県内が約 192 石、県外が約 224 石で、同家の 89 年の県外醤油販売量約 256 石は全て北海道函館・福山港向けであった²⁴⁾。

函館を中心とする北海道南部では、1870 年代後半から魚肥生産の拡大と人口増加が進み、それによる味噌・醤油需要の拡大に対応して、野辺地地域では 80 年代に北海道向けの味噌・醤油生産が急増した。そして野辺地の廻船業者の北海道進出と野辺地産味噌・醤油の北海道販売が組み合わせられて、野辺地と北海道のつながりが急速に深まった。そのことは、白銀家のように、野辺地・北海道間を専門的に結ぶ廻船業者の活動を活発化させた。白銀家は、史料の残存状況からみて、1870 年代後半から 2 隻の和船で野辺地と北海道の間を頻繁に航海したと思われるが、表 5 を見ると、87 年の北海道での取引先は函館が中心で、それ以外に渡島半島の先の日本海側の寿都港およびそれに隣接する歌棄郡での販売も多かった。味噌をかなり運んでおり、函館では石澤孫十郎と小林豊治郎にかなり集中して販売した。また歌棄郡の増田清七にも味噌と醤油をかなり販売し、代わりに身欠鯿を買い入れた。

函館の石澤孫十郎には、野坂家の嘉宝丸も 1888 年に醤油を販売したが(表 4)、嘉宝丸は味噌を販売しておらず、嘉宝丸が北海道で販売した醸造品が味噌より醤油が中心であった背景には、分家常吉家の醸造生産が味噌よりも醤油の比重が高かったことがあったと考えられる。また、嘉宝丸や松尾丸が北海道で醸造品を販売した函館の田中正右衛門、江差の柴田与兵衛、小樽の藤野弥三兵衛のうち²⁵⁾、田中正右衛門・柴田与兵衛は、近世期からの旧株仲間廻船問屋で、藤野弥三兵衛は近世期に場所請負人として特権的に漁業と商業を行い、近代期も北海道最大の網元として大規模に漁業を行った藤野家の小樽支店で、主に近世期からの取引網を活かしていた。一方、白銀家廻船の函館での主な取引相手は、小林豊治郎・石澤孫十郎・平田孝兵衛・五十嵐市太郎などいずれも 1898 年時点の『日本全国商工人名録』には挙げられない中小商家で、野坂家廻船の取引相手とは経営規模にかなり差があった²⁶⁾。また白銀家廻船が北海道で買い入れたのは主に食用の身欠鯿で、それを手に入れるために、寿都地域周辺の漁村に赴いて直接醸造品を漁民らに販売した²⁷⁾。その点では、野坂家廻船と白銀家廻船の北海道での取引動向はかなり異なったが、表 2 に戻って、野辺地港

表 5 1887 年前半白銀家廻船北海道取引先一覧

相手先	居 所	主要販売品	買入品
相馬助治郎	函館西浜町	味噌 2 樽	
小山治三郎	函館西浜町	味噌 28 樽, 生麴 1 箱	
坂口治兵衛	函館西浜町	小醤油 5 樽	
橋屋甚右衛門	函館西浜町	小醤油 5 樽, 味噌 1 樽	
関根宗蔵	函館西浜町	味噌 12 樽	
石澤孫十郎	函館西浜町	味噌 136 樽, 小醤油 11 樽, 柏木皮 50 丸	
市中久三郎	函館西浜町	味噌 9 樽	
鈴木名菊治	函館西浜町	味噌 36 樽, 小醤油 26 樽, 大麦 7 俵	
福司藤吉	函館西浜町	味噌 4 樽	
五十嵐市太郎	函館西浜町	味噌 42 樽, 小醤油 5 樽	
廣嶋喜兵衛	函館西浜町	味噌 4 樽	
渡辺佐兵衛	函館西浜町	味噌 3 樽	
荒川忠蔵	函館幸町	味噌 1 樽	庄内白米 5 俵
石垣秀助	函館弁天町	味噌 20 樽, 小醤油 1 樽	
平田孝兵衛	函館弁天町	味噌 46 樽, 生麴 1 箱, 栗 30 俵, 箒 240 本	
片石兼松	函館弁天町	味噌 18 樽, 生麴 1 俵, 栗 3 俵	
山田留吉	函館若松町	味噌 2 樽	
青木理右衛門	函館若松町	味噌 8 樽, 小醤油 15 樽, 生麴 2 箱	
小林豊治郎	函館仲浜町	味噌 392 樽	
竹内松造	函館山の上町	醤油 5 樽	
㊦	函館大町	味噌 1 樽	
飯田宇八	函館大延町	小醤油 7 樽, 味噌 4 樽	
酒谷支店	函館塩留町	小醤油 1 樽	
㊧	函館春日町	味噌 10 樽	
庄内屋正蔵	福山唐津内町	身欠 32 本	身欠 32 本, 越後酒 20 樽
松橋弥兵衛	福山博知石町	醤油 7 樽	
山本忠兵衛	松前郡宮歌村	卯の花 92 斤, そば 4 斗 5 升, 生麴 2 俵	
滝谷伝八	寿都港	味噌 118 樽, 小豆	
東海林文太郎	寿都港	味噌 30 樽, 生麴	
㊨	寿都港	味噌 26 樽	
増田清七	歌楽郡有戸村	味噌 230 樽, 小醤油 53 樽, 大醤油 11 樽 柏木皮 1,667 丸, 箒 184 本, 玉子 5 箱	身欠 161 本
小川良助	歌楽郡有戸村	味噌 23 樽, 大醤油 12 樽, 小醤油 5 樽	身欠 78 本, 数の子 2 本
佐々木三太郎	歌楽郡有戸村	味噌 25 樽, 大醤油 2 樽	
小笠原孫助	歌楽郡潮路村	味噌 58 樽, 小醤油 4 樽, 大醤油 1 樽, 玉子 899 個, 箒 40 本, 麻糸約 15 貫 50 匁	
掛塚萬吉	歌楽郡潮路村	小醤油 1 樽, 小豆 2 俵	身欠 14 本, 塩引 3 本
㊩	歌楽郡潮路村	味噌 10 樽	身欠 1 本
㊪	歌楽郡潮路村	味噌 2 樽	

(注) 白銀家廻船の第一・二次往復での北海道での売買品を集計。身欠は身欠鯨, 塩引は鮭塩引と考えられる (以下の表も同様)。

(出所) 明治 20 年「渡島差引帳」(白銀家文書, 野辺地町立歴史民俗資料館蔵) より作成。

の主要移出品では醤油より味噌がかなり多く, 移入品では北海道海産物が多かったことから見て, 白銀家廻船の動向は野辺地港全体の物流動向を反映していた。

Ⅳ 1880年代の北海道商人の味噌・醤油取引——佐藤栄右衛門家の事例

流通構造の分析には双方向の視点が欠かせないため、北海道商人側の味噌・醤油取引も検討する。取り上げるのは、前述の表5で白銀家廻船が函館以外で主に取引した歌棄郡に拠点を置き、後に白銀家廻船とも取引した佐藤栄右衛門家である。佐藤栄右衛門家は、近世後期に松前藩城下の福山湊に移住した岩代国信夫郡出身の商人で、幕末期に歌棄・磯谷場所での漁業と交易を松前藩より請け負った特権商人であった²⁸⁾。そのため、歌棄・磯谷場所の優良漁場で幕末期から漁業を営むとともに場所内での交易独占権も持ち、出稼ぎ漁民に操業を認める代わりに漁獲物の一部を納めさせたり、着業に必要な物資を前貸ししたりした。近代に入って場所請負制は廃止されたが、佐藤家は歌棄郡に本拠を移して歌棄郡・磯谷郡での漁業を継続し、地域漁民への必要物資の前貸しを続けた。

その意味で、近代前期の歌棄郡・磯谷郡において佐藤家は最大の漁業家であるとともに、漁民への物資前貸しを行う最大の仕込商人でもあった。そして歌棄郡に隣接する寿都港が同地域の主要港となったため、佐藤家は寿都郡でも漁業を行い、歌棄郡の本店（本店）の他に、磯谷店・寿都店を設けた²⁹⁾。佐藤家は、漁獲物を魚肥や身欠鯨に加工して北前船に販売したが、同時に自家の漁業経営や地域の漁民への必要物資を北前船から購入した。それらのなかで味噌・醤油の購入を示したのが表6である。佐藤家が仕入れた味噌・醤油は、1880年代前半は石川県七尾・岡山県（備前国ほか）・大阪など遠方で製造されたものが多く、その後、津軽味噌・越後醤油を購入するようになり、80年代後半は野辺地産の醤油（南部醤油）も仕入れるようになった。仕入先にも変化があり、1880年代前半は石川県七尾や大阪の北前船主の船から主に仕入れたが、80年代後半は新潟県宮川の北前船主の船や、野辺地の白銀甚之助家の廻船と考えられる大運丸甚之助から味噌を仕入れた。表6の仕入先に佐藤家寿都店とあるのは、佐藤家寿都店が廻船から仕入れた味噌・醤油を佐藤家本店が購入したことを示し、それらのうち越後味噌・醤油は、新潟県の北前船主の船から佐藤家寿都店が購入し、南部醤油は青森県野辺地の廻船業者から佐藤家寿都店が購入したと考えられる。

近代に入って青森県で味噌・醤油醸造が盛んになるとともに、歌棄・寿都などの北海道日本海沿岸地域でも、遠方から味噌・醤油を購入するのではなく、近隣の青森県産の味噌・醤油を購入するようになった。それは、前述のように北海道産魚肥生産の拡大と青森県産味噌・醤油製造の拡大を結び付ける三角交易の展開にもつながった。そのことが、歌棄・寿都地域の漁業のあり方に変容をもたらしたことも指摘しておきたい。前述の表5で白銀家廻船と歌棄郡で積極的な取引をしていた増田清七は³⁰⁾、幕末期に出稼漁民として歌棄地域で着業し、佐藤家から必要物資の前貸しを受けていたが、近代前期の流通構造の流動化のなかで新たに登場した廻船業者と取引することで、仕込商人の支配を脱して有力漁家に成長した。また後掲の表7で白銀家廻船と取引があった歌棄郡の加藤スミも、1888（明治21）年時点では建網場を所有していなかったが、90年代に漁業経営を拡大して20世紀初頭には建網場3カ所を所有するに至った³¹⁾。青森県の味噌・醤油醸造の拡大は、北海道漁業構造の転換にも大きな影響を与えた。むろん佐藤家もこれに対して新たな対応を図り、物

表 6 佐藤栄右衛門家の味噌・醤油仕入れ

年月日	仕入先	居 所	仕入品	金 額	備 考
1881・6・7	久保家壽保丸	石川県橋立	津軽味噌 33 樽	96 円 03	
1881・8・11	永徳丸鹿渡藤七	石川県七尾	七尾醤油	94 円 72	
1881・8・11	永徳丸鹿渡藤七	石川県七尾	七尾味噌	46 円 08	
1881・8・18	岐祝丸鈴木沢蔵		大阪醤油 1 斗入 50 樽	58 円 20	
1881・8・26	栄吉丸三九郎		米・味噌・醤油	204 円 25	旭醤油と思われる
1881・10・25	佐藤家磯谷店	北海道磯谷	旭醤油 2 斗入 10 樽	16 円 70	永福丸六三郎より購入分
1882・6・1	金剛丸吉左衛門		七尾酒・醤油・味噌	33 円 21	
1882・7・31	永徳丸鹿渡藤七	石川県七尾	七尾醤油	54 円 42	
1882・8・6	嘉徳丸彦左衛門		醤油	31 円 52	備前醤油と思われる
1882・8・6	嘉徳丸彦左衛門		醤油・黒胡麻・麴など	123 円 45	備前醤油と思われる
1883・6・23	観音丸三次郎		醤油	25 円 80	越後醤油と思われる
1883・6・30	中川猪之吉	北海道寿都	津軽味噌 40 樽	80 円	
1883・7・12	永徳丸鹿渡藤七	石川県七尾	七尾醤油 29 樽	22 円 50	
1883・7・25	廣徳丸浅吉	大阪	津軽味噌・飴	90 円 81	
1884・3・4	若山順平	北海道函館	味噌 100 樽	150 円	
1884・6・23	廣徳丸松本彦四郎	大阪	津軽味噌	15 円 52	
1884・6・23	廣徳丸松本彦四郎	大阪	津軽醤油	3 円 54	
1884・6・27	永徳丸鹿渡藤七	石川県七尾	七尾醤油	40 円 74	
1884・8・29	福神丸七五郎	青森県野辺地	醤油	14 円 07	津軽醤油と思われる
1885・6・24	佐藤家寿都店	北海道寿都	越後味噌 40 樽	42 円	
1885・8・19	開運丸栄次郎		七尾醤油 29 樽	19 円 49	
1887・7・14	佐藤家寿都店	北海道寿都	越後醤油 1 斗入 20 樽	15 円 60	
1887・11・6	佐藤家寿都店	北海道寿都	南部醤油 1 斗入 5 樽	3 円 70	
1888・6・22	塩田佐平太	新潟県宮川	越後醤油 1 斗 5 升入 30 樽	不明	
1888・6・22	塩田佐平太	新潟県宮川	越後味噌 20 樽	不明	
1888・7・3	大運丸	青森県野辺地	味噌 52 樽	71 円 76	
1890・4・21	佐藤家寿都店	北海道寿都	越後醤油 2 樽	不明	
1890・6・12	大運丸甚之助	青森県野辺地	味噌 50 樽・柏木皮 400 丸	112 円 10	
1890・8・10	佐藤家寿都店	北海道寿都	越後醤油 25 樽	22 円 50	

(注) 備考欄は、佐藤家が仕入れた醤油を同家磯谷店に販売する際に、付記された情報より推定。旭醤油は富山県の醤油会社の製品。金額の円の右側は銭で銭未満を四捨五入。福神丸七五郎は野辺地の野村治三郎家の廻船、大運丸甚之助は野辺地の白銀甚之助家の廻船と考えられる。金額の円の右側は銭で銭未満を四捨五入。

(出所) 明治 13～18・20・21・23 年度「大福帳」(佐藤家文書、北海道大学附属図書館蔵、明治 20 年度「大福帳」のみ石橋家蔵)より作成。石橋家蔵の佐藤家文書については複製を北海道立文書館で閲覧。

資前貸しや漁場貸付などの仕込商人としての役割を後退させつつも、漁業の直接操業を拡大し、さらに漁業のみでなく数百町歩の原野を取得して農牧業へ展開した³²⁾。その結果、佐藤家は歌棄・寿都地域での有力者の地位は維持し、寿都銀行頭取や後志興農株式会社取締役などを務め(由井・浅野編、1988-89)、1904 年に北海道会議員に選出された³³⁾。

V 輸送網の近代化と野坂家・白銀家

1890 年代になると輸送網の近代化が野辺地をめぐる物流に大きな影響を与えた。前述のように 1880 年代後半に国内定期汽船網の整備が進んだ結果、野坂家は廣海惣太郎家との取引で汽船運賃

表 7 1893 年白銀家廻船の野辺地以外での取引先一覧

相手先	居 所	主要販売品	主要買入品
現金部 萬神丸正次郎 田谷太左衛門	越中堀岡	改良みそ6樽、並みそ8樽、大醬油2樽、小醬油2樽、大豆25俵 数の子5本、柏木皮660丸 並みそ10樽、大醬油5樽	大空1個、小空170個 生麴4箱
宮本源次郎 千葉伝蔵	青森浜町 青森安方町	鰯104函	身欠20本
小山治三郎 石澤孫十郎 菅原治郎吉 松橋象藏 本庄 佐藤甚之助 奥寺仁三郎 相馬助治郎 石光亀四郎 酒谷支店 大越源助 林藤次郎 鍋田為藏 太刀川善吉 阪口治兵衛 渡辺正義 大井梅次郎 小山大次郎 佐藤八十八 新與三郎 鈴木商店 中谷音弥 小林豊次郎 高橋清治 中村仁三郎 平田孝兵衛 加藤政治 山崎作藏 佐々木栄助 中村藤吉郎 高山由平 石垣秀助 橋谷甚右衛門 荒川忠藏 能戸豊吉 前田嘉左衛門	函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館西浜町 函館東浜町 函館東浜町 函館仲浜町 函館弁天町 函館弁天町 函館弁天町 函館弁天町 函館幸町 函館幸町 函館幸町 函館幸町 函館幸町 函館幸町 函館幸町	改良みそ104樽、並みそ96樽 改良みそ15樽、並みそ178樽、大醬油3樽、小醬油3樽、柏木皮20丸 改良みそ34樽、並みそ208樽、大醬油35樽 改良みそ44樽、並みそ174樽、醤油5樽 改良みそ9樽、並みそ10樽 改良みそ88樽 改良みそ113樽、並みそ41樽、大醬油11樽、柏木皮1,285丸 改良みそ3樽、並みそ70樽 改良みそ26樽、並みそ28樽、大醬油1樽、小醬油2樽、柏木皮140丸 並みそ116樽 改良みそ15樽、並みそ25樽 改良みそ20樽、並みそ9樽、大醬油11樽、小醬油8樽、柏木皮194丸 改良みそ40樽 改良みそ81樽、大醬油3樽、醤油5樽 改良みそ16樽、並みそ329樽、柏木皮140丸 大醬油1樽、小醬油2樽 みそ15樽 改良みそ10樽、並みそ37樽 並みそ15樽 並みそ20樽 改良みそ2樽、並みそ36樽 並みそ15樽 改良みそ215樽、並みそ63樽 改良みそ10樽 改良みそ34樽、並みそ1樽、小醬油11樽、柏木皮800丸 改良みそ53樽、並みそ62樽、大醬油7樽、小醬油1樽、柏木皮191丸 改良みそ7樽、並みそ2樽、小醬油16樽 改良みそ41樽、並みそ2樽、小醬油1樽 改良みそ4樽、並みそ6樽 改良みそ16樽 改良みそ22樽、並みそ5樽 改良みそ25樽、並みそ78樽、醤油4樽 改良みそ35樽、並みそ17樽 並みそ50樽、大醬油1樽、小醬油3樽 改良みそ86樽、並みそ468樽、大醬油12樽、醤油5樽、柏木皮1,000丸 改良みそ15樽、並みそ15樽	塩74俵、白米2俵、鰯1,200本 筋子40樽 石油200函、玉砂糖6挺、玄米5俵 塩202俵 鯉鱈1,963尾、塩引400尾 塩引110本 玉子60駄 炭1俵 石油空缶171個 縄 筥4束、縄20丸、大間・中間縄19束 鰯2,760本、鮭129本、焼酎100個

(注) 「改良みそ」以外は、特定の印がないものは「並みそ」とした。みそ・醤油を合わせて10樽未満のみを取引した相手は省略した。

(出所) 明治26年「諸方差引帳」(白銀家文書, 野辺地町立歴史民俗資料館蔵)より作成。

積を利用するようになった。野坂勘左衛門家勘定目録の1891（明治24）年度の年度末預置荷物勘定には、約2,759円分が魚粕嘉宝丸積廣海預け分とあるが、同時に約1,977円分が魚粕汽船積廣海家預けとされた³⁴⁾。つまり野坂家は、自らの所有帆船で貝塚まで運んで廣海家に魚肥を預けると同時に、汽船輸送を利用して廣海家に魚肥を送った。廣海家からみると、廻船の貝塚への来航を待たずに、汽船輸送を利用して直接産地の商人から仕入れようとしたと考えられる。産地直接仕入の流れは、1891年に日本鉄道の上野―青森間が全通して野辺地へも鉄道が開通するとさらに強まった³⁵⁾。廣海家は1893年から直接店員を北海道へ派遣して産地商人から直接魚肥を買い付けることとした³⁶⁾。その場合に廣海家は、北海道から貝塚までの魚肥輸送で汽船運賃積を利用しており、帆船買積経営を行ってきた遠隔地間の船持商人にとって厳しい状況となった。北前船主らは、商権を守るために共同歩調を取ったり、商圈を拡大するために北海道奥地へ進出したりしたが（中西、2009）、野坂勘左衛門家は帆船経営を縮小し、これまでの酒造に加えて味噌製造を開始することでこれに対応した。1893年度の野坂勘左衛門家勘定目録には、約1,879円の酒造仕込米（256石6斗8升1合）とともに約4,153円の味噌製造仕込メ高が計上された³⁷⁾。そして魚肥取り扱いでは、1894年に嘉宝丸を北海道福山の山本久右衛門に売却して、野坂勘左衛門家と廣海家で南部粕共同買付座

相手先	居 所	主要販売品	主要買入品
斎藤長左衛門 大淵由五郎 菊池萬吉郎 船山虎蔵 寺崎寅吉 忠谷商店 野島三次郎 貫名顯義 越後九郎 介 小島三太郎 伊太頭金蔵 沼山石松 立花元次郎 新政吉 長谷川フツ 橋谷支店	函館幸町 函館幸町 函館幸町 函館大黒町 函館大黒町 函館大町 函館大町 函館末広町 函館旅籠町 函館旅籠町 函館地蔵町 函館見張小路 (函館) (函館) (函館) (函館) (函館) (函館)	改良みそ 16 樽 改良みそ 4 樽, 並みそ 8 樽, 小醤油 3 樽, 焼酎 411 個 改良みそ 10 樽 改良みそ 2 樽, 大醤油 3 樽, 小醤油 4 樽 改良みそ 16 樽, 大醤油 12 樽 並みそ 47 樽 改良みそ 5 樽, 並みそ 10 樽 改良みそ 67 樽 大醤油 2 樽, 木敷 200 丸 改良みそ 1 樽 並みそ 5 樽, 大醤油 1 樽, 小醤油 1 樽, 木敷 351 丸 改良みそ 12 樽 みそ 170 樽, 小醤油 6 樽 数の子 5 本 改良みそ 15 樽, 並みそ 8 樽 改良みそ 36 樽, 並みそ 5 樽, 大醤油 1 樽, 小醤油 10 樽 並みそ 54 樽, 大醤油 4 樽	白米 3 俵 樺太鱈 3,373 本 石油空函 180 個, 大空 51 個, 小空 767 個 棟呂皮 2,000 枚 大空品 11 樽 身欠 114 本 玉子 383 個, 生麴 4 箱, 糸玉 29 個
正 松橋弥兵衛 帯向与惣兵衛 若山吉造 山本忠兵衛	上磯郡有川村 福山博知石町 島牧郡本目村 島牧郡原歌村 島牧郡原歌村	改良みそ 108 樽 並みそ 16 樽, 小醤油 80 樽, 蕨の花 5 俵 並みそ 170 樽, 小醤油 6 樽 柏木皮 220 丸 並みそ 20 樽, 小醤油 70 樽	身欠 114 本 塩引 64 本, 生鮪 68 尾, 石油空函 4 個
大場忠兵衛 小阪由太郎 高橋平次郎 三原儀三郎 森田多作 刈屋駒之進	寿都港 寿都港 寿都港 寿都港 寿都港 寿都港	改良みそ 1 樽 改良みそ 5 樽, 並みそ 10 樽 改良みそ 5 樽, 並みそ 10 樽 改良みそ 65 樽, 並みそ 305 樽, 小醤油 70 樽, 柏木皮 1,175 丸, 生麴 3 箱	身欠 6 本, 小空 87 個, 大空 7 個 身欠 11 本, 小空 50 個, 大空 94 個 身欠 34 本 身欠 295 本, 数の子 21 本
佐藤栄右衛門 増田清七 俵儀栄吉 水江外吉 高吉庄次郎 葛田半之助 鶴原弥助 加藤スミ	歌棄郡有戸村 歌棄郡有戸村 歌棄郡潮路村 歌棄郡潮路村 歌棄郡潮路村 歌棄郡潮路村 歌棄郡潮路村 歌棄郡種前村	改良みそ 30 樽, 並みそ 20 樽 改良みそ 5 樽 並みそ 10 樽 並みそ 35 樽 小醤油 10 樽 並みそ 10 樽 並みそ 99 樽, 大醤油 1 樽, 小醤油 27 樽, 柏木皮 1,245 丸, 生麴 1 箱 並みそ 5 樽	身欠 13 本 身欠 10 本 身欠 5 本, 椎茸 900 匁 身欠 129 本, 数の子 1 本 身欠 9 本
鈴木清助 松本由太郎	岩内御鈴内町 介	柏木皮 13 個 介	石油空函, 鰯多数

を設けた³⁸⁾。野坂家が野辺地での地元産鰯粕の買入を行い、それらを汽船運賃積で貝塚に運び、貝塚で販売することを廣海家が行い、その損益を両家で分配するものであり、遠隔地間の情報共有が難しい状況でのリスク分散の意味でこのような取引形態が選択されたと考えられる。ただし、より一層の輸送網・情報網の近代化により情報伝達手段が発達すると、廣海家は野坂家との共同買付座を止め、自家の店員を北海道へ派遣して北海道産魚肥の直接買付を盛んに行った³⁹⁾。その意味では、産地商人と集散地・消費地商人の共同買付は過渡的な取引形態であったと言える。

野坂家や野村治三郎家が廻船経営から撤退するなかで、野辺地港の物流における白銀家廻船の重要性は高まった。1893 年時点の白銀家廻船の野辺地以外の地域での取引を表 7 で確認すると、白銀家廻船の函館での取引相手はかなり増加し、80 年代と継続した取引相手もいるが、菅原治郎吉・酒谷支店・太刀川善吉・能戸豊吉・石垣秀助など函館の有力商家にも多くの醸造品を販売するに至った⁴⁰⁾。なお函館への味噌・醤油移入は、1887 年時点で味噌が約 25 万 7,000 貫で、その内訳は津軽味噌が 47%、越後味噌が 32%、その他 21% であり、醤油が数千石で、その内訳として約 5 割が越後醤油、2 割強が東京醤油（亀甲萬、上ヤマサ）、3 割弱がその他であった⁴¹⁾。この時点では、函館産の味噌・醤油は少なく、その後函館でも味噌醤油業者が 1896 年に 3 軒、1901 年に 8 軒と増

表 8 1895 年 9～12 月の金比羅丸の動きと積荷

積 荷	荷出人	荷受人	積 荷	荷出人	荷受人
① 第 1 次登り (函館→野辺地, 9 月 2～3 日)			⑦ 第 4 次登り (函館→野辺地, 10 月 13 日)		
塩鱒 10 個 焼酎 30 個 白砂糖 1 個 焼酎 100 個 焼酎 20 個	白銀家 白銀家 白銀家 能戸豊吉より委託 西堀周吉より委託	杉山久之丞 杉山久之丞 野坂常吉	石油 30 函, 瓦 119 個 綿 1 個 釘 1 個 鱒 10 個 畳表 30 個 石油 15 函	沼山石松 沼山石松 槻内 能戸豊吉 石澤孫十郎 新興三郎	中村久治 金 野村新八郎 能戸豊吉 金 委託
② 第 2 次下り (野辺地→函館, 9 月 12 日)			⑧ 第 5 次下り (野辺地→函館, 10 月 14 日)		
改良味噌 100 樽ほか 大樽醤油 10 樽 大樽醤油 10 樽 小豆 16 俵 若月 1 個 木舞 600 丸 梨子 3 箱 小豆 2 俵	中村久治 野坂與次兵衛 野坂常吉 野村新八郎 野村新八郎 伊藤福平 野坂英治郎 黒三	沼山石松 能戸豊吉 白銀家 小島三太郎 野村治三郎支店 福来 向井福次郎 委託	改良味噌 112 樽 味噌 130 樽 味噌 50 樽 味噌 30 樽 大豆 13 俵 大豆 7 俵, 味噌 6 樽	中村久治 野村新八郎 野坂常吉 野坂勘左衛門 嶋屋又吉 江口義太郎	沼山石松 槻内 白銀家 石澤孫十郎 石澤孫十郎 小島三太郎
③ 第 2 次登り (函館→野辺地, 9 月 18 日)			⑨ 第 5 次登り (函館→野辺地, 10 月 19 日)		
石油 7 箱ほか 塩 50 俵 綿 1 箱 石油 2 箱ほか 石油 1 箱 焼酎 100 個 焼酎 30 個 焼酎 70 個 大空樽 10 個 大空樽 16 個	沼山石松 沼山石松 橋谷甚右衛門 委託 委託 委託 委託 委託 白銀家 白銀家	中村久治 金 島谷清四郎 田中清兵衛 野坂元太郎 能戸豊吉 △ 田 野坂常吉 野坂與次兵衛	石油 30 函, 戻り味噌 石油 10 函, 素麺 10 函 石油 20 函, 素麺 10 箱 素麺 2 函 秋味鮭 12 個 七嶋表 3 個 綿 2 個 石油 5 函, 素麺 2 箱 素麺 3 箱	槻内 奥寺仁三郎 沼山石松 沼山石松 槻内 太田 (七戸) 橋谷甚右衛門 橋谷甚右衛門 沼山石松	野村新八郎 山根吉三郎 中村久治 金 槻内 太田 (七戸) 安田又之丞 委託 委託
④ 第 3 次下り (野辺地→函館, 9 月 24 日)			⑩ 第 6 次下り (野辺地→函館, 10 月 23 日)		
改良味噌 200 樽ほか 改良みそ 50 樽 大醤油 13 樽 大醤油 10 樽 大醤油 10 樽 大醤油 10 樽 石油空箱 40 組・罐 36 個	中村久治 野坂勘左衛門 野坂常吉 野坂與次兵衛 野坂與次兵衛 野坂與次兵衛 白銀家	沼山石松 白銀家 白銀家 沼山石松 木村 田文 白銀家	改良味噌 100 樽 改良味噌 100 樽 味噌 100 樽 大醤油 10 樽 大醤油 2 樽 空箱 15 組	中村久治 島谷清四郎 野村新八郎 野坂常吉 野坂與次兵衛 島谷清四郎	沼山石松 小島三太郎 槻内 白銀家 沼山石松 船山奥蔵
⑤ 第 3 次登り (函館→野辺地, 9 月末)			⑪ 第 6 次登り (函館→野辺地, 10 月 27 日)		
鱒 179 個, 鮭 4 個 塩鱒 24 個, 鮭 1 個ほか 塩鱒 2,053 本 塩鱒 84 個, 石灰 20 俵 塩鱒 84 個 釘 15 樽, 赤銅板ほか 綿 3 個	西堀 立花元次郎 白銀家 沼山石松 小林重吉 槻内 橋谷甚右衛門	西堀 立花元次郎 杉山久之丞 中村久治 橋谷 野村新八郎 安田又之丞	塩 150 俵, 石油 30 函 素麺 10 函, 符縁 5 個 素麺 10 函, 戻り味噌 中障子 200 間, 屏風 畳表 10 枚 輪竹 1 丸	槻内 奥寺仁三郎 沼山石松 委託 委託 委託	野村新八郎 山根吉三郎 中村久治 金 田中清兵衛 野坂常吉
⑥ 第 4 次下り (野辺地→函館, 10 月 5 日)			⑫ 第 7 次下り (野辺地→函館, 11 月 13 日)		
改良味噌 200 樽ほか 味噌 50 樽, 小醤油 20 樽 味噌 50 樽 大豆 5 俵 大醤油 10 樽 大醤油 5 樽 大醤油 5 樽	中村久治 野坂常吉 野村新八郎 山根吉三郎 野坂與次兵衛 野坂與次兵衛 野坂與次兵衛	沼山石松 白銀家 槻内 白銀家 能戸豊吉 田文 木村	改良味噌 150 樽ほか 改良味噌 150 樽 大醤油 10 樽 味噌 50 樽 空箱 30 組 麻糸 1 個	中村久治 野坂勘左衛門 野坂常吉 野村新八郎 白銀家 利三	沼山石松 橋谷支店・小島 白銀家 槻内 白銀家 松橋
⑬ 第 7 次登り (函館→野辺地, 11 月 15 日)			⑬ 第 7 次登り (函館→野辺地, 11 月 15 日)		
			塩 150 俵 素麺 10 個 敷綿 3 個 中障子 4 間	白銀家 沼山石松 委託 委託	野坂常吉 中村久治 吉田林治ほか 金・金

(表 8 つづき)

積 荷	荷出人	荷受人	積 荷	荷出人	荷受人
蠟 1 函 大山酒 1 個, 戻り味噌 空樽大 14 個 戻り醤油 2 個 石油 10 個, 鰯 31 個	委託 槻内 白銀家 能戸豊吉 白銀家	畚 野村新八郎 野坂常吉 野坂與次兵衛 畚	石油 10 函 石油 30 函, 筋子 1 個	橋谷甚右衛門 白銀家	平尾長太 畚
⑭ 第 8 次下り (野辺地→函館, 11 月 27 日)			⑯ 第 9 次下り (野辺地→函館, 12 月 6 日)		
改良味噌 250 樽 味噌 50 樽, 醤油 20 樽 味噌 50 樽 昆布 5 個, 空箱 43 組	中村久治 野坂常吉 野村新八郎 向野安之助	沼山石松 白銀家 槻内 白銀家	改良味噌 230 樽 味噌 100 樽 大醤油 20 樽 大醤油 6 樽, 越後醤油	中村久治 野村新八郎 野坂常吉 島谷清四郎	沼山石松 槻内 白銀家 菅原治郎吉
⑮ 第 8 次登り (函館→野辺地, 11 月)			⑰ 第 9 次登り (函館→野辺地, 12 月)		
大山酒 2 樽ほか 玉砂糖 2 個 鰯 10 個 鰯 57 個, 秋味鮭 26 個 鰯 35 個, 秋味鮭 14 個 白砂糖 2 個 秋味 2 個, 玉砂糖 1 個 中障子 2 間 空樽 50 樽	委託 委託 槻内 白銀家 平屋 沼山石松 島谷清四郎 奥寺仁三郎 白銀家	田中清兵衛 安田又之丞 野村新八郎 杉山久之丞 松本彦藏 中村久治 島谷清四郎 田中清兵衛 野坂常吉	石油 30 函, 秋味 11 個 鰯 19 個 鉄 3 束, 戻り味噌 玉砂糖 1 個 土佐半紙 1 個ほか 石油 3 個 石油 3 個ほか 大空樽 17 個 大空樽 16 個 附木 2 個 石油 30 函, 秋味 36 本	沼山石松 橋谷支店 槻内 菅原治郎吉 委託 菅原治郎吉 沼山石松 沼山石松 白銀家 委託 白銀家	中村久治 松本彦藏 野村新八郎 島谷清四郎 田中清兵衛 安田又之丞 畚 野坂與次兵衛 野坂與次兵衛 中村久治ほか 畚

(注) 史料では屋印で主に記されているが, その他の白銀家文書により屋印と家名を対照させて記した。そのため若干推定が入っている。第 5 次登りに登場する太田は七戸居住。

(出所) 明治 28 年「荷物受払帳」(白銀家文書, 野辺地町立歴史民俗資料館蔵) より作成。

え, 函館商業会議所の物価調査で 1897 年以降, 津軽味噌・南部味噌と並んで函館産味噌が挙げられたが, 津軽味噌・南部味噌より価格は 2~3 割は安かった。表 7 に戻ると, 1893 年には味噌が改良されて, 依然として白銀家廻船の味噌販売が多く, 寿都港とその近隣の島牧郡・歌棄郡への味噌販売も行われ, 身欠鯨が代わりに購入された。函館では, 食用海産物の鰯や鮭や空樽 (大・小)・塩などが購入され, 野辺地では帆船経営の衰退のため遠隔地からの帆船での塩の買付が困難になり, 醤油醸造の原料の塩は函館で購入された。ただし, 塩の産地から遠く離れた函館で, 安定的に塩を購入できるかは不透明であり, 野辺地では 1897 年に野辺地食塩合資会社 (業務担当社員: 野坂勘左衛門・松本彦藏) が設立され, 主に山口県三田尻と香川県坂出で塩の買付を行い, それらを主に汽船で輸送する形態で, 政府による塩専売が施行されるまで活動した (宮澤, 2014, 82-87 頁)。

こうした白銀家廻船の取引形態は, 大きく 4 種類のタイプからなっていたと考えられる。表 8 を見よう。1895 年 9~12 月の 4 カ月間に白銀家所有金毘羅丸は野辺地ー函館間を約 9 往復半したが, 荷出人と荷受人が白銀家になっていた場合や, 委託と記された場合などがあつた。これを整理すると, 荷出人・荷受人がともに白銀家の場合は, 白銀家の自己責任売買で, 船主と荷主が一緒の買積形態となる。また, 荷出人が「委託」とされた場合は, 白銀家が荷受人から委託されて買付を行ったと考えられ, 荷主は荷受人となる。逆に, 荷受人が「委託」とされた場合は, 白銀家が荷出人から委託されて販売を行ったと考えられ, 荷主は荷出人となる。そして, 荷出人・荷受人ともに氏名が記された場合は, 白銀家は売買には関わらずに運賃をもらって輸送のみを行ったと考えられる。

これらの区別は、取引相手に応じてかなり固定していた。例えば、野辺地の中村久治家と函館の沼山石松家の間では、中村が自家産の改良味噌を沼山に販売し、沼山が石油・食用海産物などを中村に販売する固定的な取引があり、野村新八郎家と函館の槻内家の間でも、野村が自家産の味噌を槻内に販売し、槻内が塩・鉄類や海産物を野村に販売する固定的取引があり、これらの運賃積輸送を白銀家は担った。

また、前述のように白銀家は分家が函館で店を開いていたので、野辺地の荷受人が函館での買付を白銀家に委託することが多く、また、野辺地から運んだ積荷を函館で白銀家の店が買い取ったり、函館の白銀家の店が荷出人となり、野辺地まで運んで野辺地の醸造家らに販売した場合があり、白銀家自身が輸送業とともに商業活動に関わった。野辺地の醸造家のなかでも、中村久治家や野坂與次兵衛家は販売先を決めて白銀家を輸送のみで利用したが、野坂常吉家は白銀家に醤油を運んでもらうと同時に白銀家に買い取ってもらい、野坂勘左衛門家は自ら販売先を決めた場合と白銀家に買い取ってもらった場合とを使い分けた。野辺地への移入品では、前述の中村久治家・野村新八郎家を除くと、野辺地の醸造家が白銀家に函館での買入を委託したり、白銀家から買い入れる傾向が強くなり、特に雑貨類は白銀家に函館での買付を依頼することが多かった。

表2に戻って1899年時点の野辺地港の主要移出入品をみると、移出額では味噌が圧倒的比重を占め、移入額では食塩がかなりの比重を占めることとなり、味噌・醤油醸造産地としての性格を明確に示すに至った。ただし、味噌の移出額の1882年から99年にかけての激増に比べると、醤油の移出額は82年から99年にかけてむしろ減少しており、1906年には9,000円、と増加に転じたが、移出量は1899年の380石から1906年の450石とあまり伸びておらず、醤油産地としては、野辺地には限界があり、味噌中心の醸造産地になったと言える。

VI 20世紀初頭の白銀家

醤油産地としての野辺地の成長の限界には、主な市場であった北海道での競争条件が、北海道での醤油醸造家の成長や本州の巨大醤油醸造業者の北海道進出により、厳しくなったことがあったと考えられるが⁴²⁾、その一方で1899(明治32)年時点では比較的大量に食塩が移入されていた(表2)。日本鉄道野辺地駅の主要発着貨物をみると、1900年の発送貨物は食塩1,010トン、木材713トン、魚粕351トン、干塩魚349トン、鮮魚207トン、馬152トンの順で⁴³⁾、日本鉄道の青森―盛岡間で最も塩の発送が多かったのが野辺地駅の1,010トンで、次が青森駅の857トンであり、青森―盛岡間で塩の到着が多かったのは、盛岡駅1,113トン、沼宮内駅263トン、三ノ戸駅254トン、下田駅238トンの順であった⁴⁴⁾。日本鉄道は青森―野辺地間は海岸部を走るが、野辺地から内陸部に入り、そこから青森県東部・岩手県・宮城県北部はいずれも内陸部を走るため、これら内陸部での塩の需要に対応する塩流通の海陸連絡に野辺地港と野辺地駅がなっていたと考えられる。

一方、醸造品は鉄道ではあまり運ばれず、1900年の野辺地駅の到着貨物は米714トン、大豆601トン、和酒209トン、木材163トン、炭127トン、干塩魚115トンの順で⁴⁵⁾、米の到着が多く、地

元産魚肥・魚類は鉄道でかなり発送された。味噌・醤油醸造の原料大豆が鉄道でかなり他地域から運ばれているが、1900年時点で三ノ戸駅の大豆発送量が1,138トンと多く⁴⁶⁾、鉄道開通により、野辺地の味噌・醤油醸造業の原料大豆調達範囲が後背地に広がり、鉄道で運ばれるようになったことが推定できる。

このような状況下の1901年時点の白銀家廻船の取引形態を検討する。表9を見よう。1901年の白銀家所有船琴平丸は、野辺地―函館間を13往復したが、中村久治家・野村新八郎家のみでなく、角鹿吉兵衛家・松本彦蔵家・杉山久之丞家の味噌も扱うようになり、野坂常吉家・野坂與次兵衛家の醤油を合わせ、野辺地のほとんどの味噌醤油醸造家の醸造品を輸送するようになった。なお白銀家廻船2隻は、1897年に味噌11,689樽・醤油665樽、98年に味噌11,113樽・醤油503樽を野辺地から北海道へ運んでおり、味噌1樽=13貫匁・醤油1樽=2斗5升で換算すると、1897・98年の白銀家廻船の味噌積出量は年平均約15万貫匁、醤油積出量は年平均約150石前後となった⁴⁷⁾。表2に戻って野辺地港の1899年の味噌移出量は31万貫匁、醤油移出量は380石なので、野辺地港からの味噌醤油積出に占める白銀家廻船積出の比重はかなり多かった。なお、野辺地の醸造家で伊藤福平家は白銀家廻船を利用しなかったが、伊藤家は1902年時点で和船「福寿丸」(249石積)を所有しており⁴⁸⁾、自ら輸送手段を持っていたため白銀家廻船を利用する必要がなかったと思われる。

これら野辺地の醸造家のなかで、野村新八郎家・野坂常吉家・野坂與次兵衛家は白銀家に味噌・醤油を買い取ってもらった場合が多く、前述の野村・野坂系列と白銀家のつながりは深かった。中村久治家は、1895年と同様に沼山石松との固定的な取引が多く、一方、杉山久之丞家は、荷出人・荷受人ともに杉山の場合があり、杉山家も函館に店を構え、白銀家廻船を輸送のみに利用していたと言える。実際、函館出発・野辺地到着の琴平丸の運航で、杉山久之丞が荷出人、野辺地の醸造家が荷受人になった場合も多く、松本彦蔵家は杉山久之丞家を通して函館から塩を購入した。また、七戸の盛田家は函館の新興三郎と能戸豊吉支店から恒常的に石油を買い入れ、その輸送で白銀家廻船の運賃積を利用した。

このように白銀家廻船は20世紀初頭も活発に活動しており、1906年時点では野辺地と北海道の結びつきは醸造品以外の産物でも強まった。表2に戻ると、1906年の野辺地港の主要移出品は1899年と同様に味噌であったが、味噌・醤油以外の精米・樹皮も北海道が主要仕向地とされた。主要移入品の食塩は、前述の野辺地食塩合資会社の影響もあり、三田尻が主要仕出地であり、精米も主に新潟から移入したが、それ以外の生鰯・身欠鰯・石油はいずれも北海道が主要仕出地で、北海道とのつながりは深かった。1906年の野辺地駅の発送貨物は食塩434トン、干塩魚314トン、木材269トン、各種肥料236トン、鮮魚197トン、馬103トン、米103トンの順で、同年の野辺地駅の到着貨物は米1,483トン、和酒168トンの順であった⁴⁹⁾。野辺地港への移入品のうち食塩・干塩魚は鉄道で内陸部に運ばれ、また米は海運でも移入されたが鉄道でも野辺地駅にかなりの量が到着した。米は野辺地港から北海道に向けて移出されており、野辺地港は東北産米を北海道へ移出する海陸連絡の場所にもなっていた。そのなかで、味噌の移出額は1899年から1906年に減少しており、野辺地醸造業は、20世紀に入ると伸び悩んだと思われる。

表 9 1901 年の琴平丸の動きと積荷

積 荷	荷出人	荷受人	積 荷	荷出人	荷受人
第 1 次下り (野辺地→函館)			第 9 次下り (野辺地→函館)		
改良味噌 100 樽	中村久治	沼山石松	味噌 200 樽	中村久治	沼山石松
味噌 70 樽	野村新八郎	白銀家	醤油 10 樽	野村常吉	沼山石松
醤油 10 樽	野坂常吉	白銀家	味噌 50 樽	松本彦藏	奥寺仁三郎
醤油 10 樽	野坂與次兵衛	白銀家	味噌 20 樽	立花	三
柏木皮 765 丸	白銀家	白銀家	味噌 20 樽	立花	石黒
尾白縄 10 個	野村新八郎	㊦工場	味噌 18 樽	立花	酒左
函物 46 個	角鹿吉兵衛	平海	白米 12 俵	杉山久之丞	杉山久之丞
第 1 次登り (函館→野辺地)			醤油 10 樽	野坂與次兵衛	白銀家
食塩 50 俵	奥寺仁三郎	野坂勘左衛門	第 9 次登り (函館→野辺地)		
玉砂糖 15 個	奥寺仁三郎	全	石油 100 函	新與三郎	盛田 (七戸)
第 2 次下り (野辺地→福山)			玉砂糖 10 丁	杉山久之丞	吉田林治
味噌 50 樽	角鹿吉兵衛	松永	セメント 5 個	杉山久之丞	野村新八郎
第 2 次登り (福山→野辺地)			素麺 30 函	沼山石松	中村久治
生鯿 308 丸	平尾	野坂勘左衛門	食塩 60 俵	沼山石松	中村久治
第 3 次下り (野辺地→函館)			石灰 100 俵	小島三太郎	野村新八郎
改良味噌 200 樽	中村久治	沼山石松	石灰 50 俵	杉山久之丞	野村新八郎
味噌 50 樽	松本彦藏	白銀家	第 10 次下り (野辺地→函館)		
柏木皮 1,000 丸		白銀家	味噌 100 個	中村久治	沼山石松
第 4 次登り (函館→野辺地)			味噌 50 個	松本彦藏	白銀家
函物 30 個	杉山久之丞	杉山久之丞	味噌 30 個	野村新八郎	白銀家
石油 100 函	新與三郎	盛田 (七戸)	醤油 10 個	野坂與次兵衛	白銀家
第 5 次下り (野辺地→函館)			柏木皮 500 丸	白銀家	白銀家
味噌 171 個	中村久治	沼山石松	石油空函 305 個	白銀家	白銀家
味噌 50 個	角鹿吉兵衛	松永	味噌 20 個	杉山久之丞	杉山久之丞
味噌 50 個	野村新八郎	白銀家	第 10 次登り (函館→野辺地)		
醤油 10 個	野坂常吉	白銀家	石油 200 個	能戸豊吉支店	盛田 (七戸)
醤油 10 個	野坂與次兵衛	㊦	塩魚 138 個	船木	江口義太郎
空函 98 個			玉砂糖 10 個	杉山久之丞	吉田林治
第 5 次登り (函館→野辺地)			雑貨 16 個	白銀家	川
砥石 300 個	沼山石松	中村久治	石油 30 函	島谷清四郎	島谷清四郎
食塩 100 俵	杉山久之丞	杉山久之丞	食塩 50 俵	杉山久之丞	松本彦藏
第 6 次下り (野辺地→函館)			第 11 次下り (野辺地→函館)		
改良味噌 150 個	中村久治	沼山石松	味噌 200 個	中村久治	沼山石松
改良味噌 120 個	杉山久之丞	杉山久之丞	味噌 50 個	野村新八郎	白銀家
改良味噌 50 個	角鹿吉兵衛	立花元次郎	味噌 50 個	角鹿吉兵衛	△ (小樽)
大醤油 10 個	野坂常吉	沼山石松	栗 10 俵	今	備前 (㊦)
第 6 次登り (函館→野辺地)			栗 15 俵	立花秀司	全
玉砂糖 10 個	沼山石松	中村久治	玉砂糖 12 個	西垣	石垣
玉砂糖 10 個	杉山久之丞	吉田林治	第 11 次登り (函館→野辺地)		
石油 100 個	新與三郎	盛田 (七戸)	石油 200 個	能戸豊吉支店	盛田 (七戸)
竹 10 個	備甚	伊藤福平	魚 103 個	船木	江口義太郎
第 7 次下り (野辺地→函館)			食塩 30 個	杉山久之丞	松本彦藏
味噌 120 個	中村久治	沼山石松	魚 30 個	杉山久之丞	松本彦藏
味噌 100 個	角鹿吉兵衛	立花元次郎	第 12 次下り (野辺地→函館)		
味噌 10 個	吉田林治	善次	味噌 250 個	中村久治	沼山石松
空函 161 個	萩野	全	味噌 50 個	角鹿吉兵衛	立花元次郎
第 7 次登り (函館→野辺地)			味噌 20 個	松本彦藏	産業会
焼酎 30 個	沼山石松	中村久治	醤油 10 個	野坂與次兵衛	石垣
荒砥 300 丁	沼山石松	中村久治	第 12 次登り (函館→野辺地)		
魚 49 個	船木	嶋屋又吉	食塩 400 俵	杉山久之丞	松本彦藏
石灰 50 俵	奥寺仁三郎	全	第 13 次下り (野辺地→函館)		
石油 100 個	新與三郎	盛田 (七戸)	味噌 200 個	中村久治	沼山石松
第 8 次下り (野辺地→函館)			味噌 30 個	松本彦藏	白田幸太郎
味噌 150 個	中村久治	沼山石松	味噌 18 個	松本彦藏	㊦
味噌 50 個	松本彦藏	白銀家	味噌 70 個	野村新八郎	杉山久之丞
味噌 10 個	伊藤福平	備甚	第 13 次登り (函館→野辺地)		
味噌 40 個	野村新八郎	白銀家	石油 310 函	能戸豊吉支店	全
味噌 30 個	野村新八郎	石澤孫十郎	魚 51 個	沼山石松	不
味噌 30 個	野村新八郎	石塚	鰯 55 個		出産物

(注) 運賃 1 円以上の積荷のみを示した。第 8 次登り (函館→野辺地) には運賃 1 円以上の積荷がないため省略。

荷出人・荷受人の多くは屋印で記されたが、ほかの白銀家文書よりそれを家名と対照させた。

(出所) 明治 34 年「琴平丸往復荷扱帳」(白銀家文書、野辺地町立歴史民俗資料館蔵) より作成。

1906年時点の野辺地港への入港商船数は、和船が215隻、西洋型風帆船が72隻、汽船が151隻であった。汽船が多く見えるが、汽船151隻の延トン数は26,253トンなのでこれらの汽船は平均174トンの小型汽船であった⁵⁰⁾。和船215隻の延トン数が1,202トンなので、和船は平均約6トンの艀船が多かったと考えられる。野辺地―北海道間の輸送のほとんどは西洋型風帆船と汽船に転換していたと考えられるが、白銀家の取引形態に見られたように商業と輸送業の分化はあまり進んでおらず、多様な輸送形態で行われていた。

Ⅶ おわりに――明治期における野辺地経済の転換と海運業者

近世期の野辺地湊は、地元産大豆・魚粕の移出湊であり、盛岡藩の御用銅の移出湊でもあった。盛岡藩は、野辺地湊の有力船主を御用船主として雇い、御用銅を大坂へ輸送させるとともに、産物改役所を設けて大豆・魚粕も領内の特産物として藩が集荷し、それらを御用船主に大坂へ輸送させた⁵¹⁾。幕末期には野坂勘左衛門家と野村治三郎家はいずれも、大坂御仕送御用達として大豆・魚肥の集荷と輸送を担い、野辺地湊は政策的要素でかなり発達した。ところが、明治維新により、港としての特権的地位が失われ、野辺地地域では地元産大豆を原料とした味噌・醤油醸造業が始まった。それと近世来の地元産魚肥移出が1870年代・80年代の野辺地経済を支えたと考えられる。その後、北海道開発の進展が野辺地経済を大きく転換させ、北海道で鯡魚肥生産が拡大するにつれ、野辺地の地元産魚肥の販路は狭まり、逆に味噌・醤油醸造業は、北海道人口の増大による需要拡大で成長した。その結果、1890年代後半には野辺地は北海道向け味噌・醤油醸造産地となったが、醤油醸造は、北海道での競争が激しくなるとともに北海道向け移出が頭打ちになって低迷した。一方、味噌製造は、原料大豆の立地条件から、その後もある程度の製造量を継続した。

例えば、野辺地町を含む上北郡の1906年時点の味噌製造量は18万1,000貫（1貫=6.25斤換算で約113万斤、産額54,440円）に対し、醤油製造量は859石（産額12,880円）であり⁵²⁾、生産額からみて醤油よりも味噌製造がかなり盛んで、表2では同年に野辺地から北海道へ113万斤の味噌と450石の醤油が移出され、味噌は製造量のほとんどが北海道へ移出されたが、醤油は北海道へ移出されたのは製造量の半分程度に止まった。とは言え、醸造業のみで工業化を図るのは難しく、牧畜業などを含む第一次産業が野辺地経済の中心であり続けた⁵³⁾。そのなかで北海道との関連も醸造品以外に多様化し、北海道から野辺地へ食用海産物が、野辺地から北海道へ米がそれぞれ移出され、野辺地港と野辺地駅での連絡を通して、北海道と青森県東部・岩手県内陸部を結ぶ結節点となった。このように野辺地港は、定期汽船の寄港地から外れたため、定期汽船網の整備とともに遠隔地市場との結びつきは弱まり、港の規模は相対的に低下したものの、北海道市場の拡大と結び付き、鉄道の開設も活かしながら、小型汽船を中心とする地廻り輸送網の拠点となったのである。

こうした野辺地経済の展開に野辺地港の海運業者は柔軟に対応した。野坂家は近代に入って醤油・味噌醸造へ進出し、野辺地産醤油・味噌を北海道へ運び、北海道で販売するとともに魚肥を買い入れ、それを畿内へ運んで販売し、帰路に醤油原料の塩を買い入れて野辺地に戻る三角交易へと

展開することで、北海道での魚肥生産の拡大と野辺地地域の味噌・醤油醸造拡大を有機的に結び付けた。そして白銀家はより直接に野辺地経済と北海道経済を結び付け、野辺地と北海道の往復輸送を行うとともに、函館に支店を設け、産地での買付と消費地での販売を一貫して行った。こうした産地と集散地・消費地を直接結ぶ流通業者の動きは、前述の野坂家と廣海家の肥料共同買付でも見られ、このような野辺地の海運業者の経営展開は、北海道魚肥をめぐる流通構造を流動化させ、北海道漁業においても新たな流通経路と結んで前貸商人の支配から脱する有力漁家の動きが見られた。それに対して前貸商人が商業的支配から漁業や農業など直接生産過程への進出を深めるなど、流通業者の柔軟な対応により新たな流通経路が形成されたことが、産業構造を転換させる大きな契機となっており、本特集のテーマである流通業者の企業家活動が、新たな地域経済を創出する姿が明治期の北海道と青森県をつなぐ経済圏で見られたと言えよう。

付記 本稿執筆に当たり、史料閲覧に際し、廣海家の皆様、石橋家の皆様、永峰文男氏、宮澤秀男氏、駒井知広氏、鈴木幹人氏および野辺地町立歴史民俗資料館、貝塚市教育委員会、北海道大学附属図書館、北海道立文書館、国立公文書館に大変お世話になりました。記して、心より感謝申し上げます。なお、本稿は、平成29～令和2年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「醸造業による農村工業化と和食文化の形成に関する地域比較研究」(研究代表者：井奥成彦、課題番号17H02553)の研究成果の一部である。

注

- 1) 函館一小樽間の北海道鉄道は、1902年に部分開通し、05年に全通した(明治40年「鉄道局年報」附録：全国鉄道開業明細表(野田・原田・青木編、1981b))。そして青函鉄道連絡船航路は1911年に開設された(日本国有鉄道編、1997)。
- 2) 「諸書上物控」(野村家文書(野辺地町史編さん刊行委員会編、1992a))を参照。
- 3) 以下の記述は、『野坂家之歴代』(私家版)1976年を参照。
- 4) 「酒屋御用御礼銭上納書留」(野辺地町史編さん刊行委員会編、1995)および宝永5年「売掛帳」(野辺地町史編さん刊行委員会編、1996a)を参照。
- 5) 文久3年「市川魚粕御買上代御下ケ金并積渡扣帳」(野辺地町史編さん刊行委員会編、1993)、「勘定牒」(野坂勘左衛門家文書(野辺地町史編さん刊行委員会編、1992b))。
- 6) 前掲『野坂家之歴代』90頁を参照。在町の御用商人でもあり、海運業・醸造業・土地経営を兼営していた野坂家は、豪農と位置付けることも可能であるが、豪農の歴史的な位置付けについては別稿で論じたい。豪農概念については、井奥・谷本編(2018)および萬代(2021)などを参照。
- 7) 以下の記述は、前掲『野坂家之歴代』および野村(1997)を参照。
- 8) 「永々勘定帳」(野坂勘左衛門家文書、野辺地町立歴史民俗資料館蔵)を参照。野坂常吉が野坂勘左衛門家の店支配人を務めた1878年以降の野坂勘左衛門家廻船の仕切状は、野坂常吉家に残されており、それらの取引は野坂常吉が仲介していた(永峰文男編、2000)。それゆえ表3・表4は、野坂常吉家に残された仕切状から作成し、取引の全体像を示すものではない。野坂勘左衛門家には1877年以降の廻船の取引を示す史料は残されていない。
- 9) 野坂勘左衛門家の酒造業については、前掲「酒屋御用御礼銭上納書留」、野村治三郎家の酒造業

- については、中西（2009、第3章）を参照。
- 10) 宮良編（1990）の77-78頁を参照。
 - 11) 白銀家については、野辺地町史編さん刊行委員会編（1997a）を参照。
 - 12) 貝塚の廣海家については、石井・中西編（2006）を参照。野坂家と廣海家の取引は、中西（2006、125頁）の表3-2を参照。
 - 13) 明治23年「証券帳」（廣海家文書、廣海家蔵、貝塚市教育委員会保管）を参照。同史料では、役所への届で嘉宝丸の所有者は廣海惣太郎とされたが、実際の廣海家の取引関係を示した帳簿では、野坂家廻船の嘉宝丸が廣海家と取引した扱いとされた（明治20年代の「仕切帳」廣海家文書、廣海家蔵、貝塚市教育委員会保管）。野坂家は、嘉宝丸の定繋港を大阪にするため登記上の所有者を廣海家に依頼したと考えられる。
 - 14) 野村家と廣海家の取引は、中西（2009、183頁）の表3-11を参照。
 - 15) 郵便汽船三菱会社は、函館―青森間の定期航路を1880年に開設し、同年に函館―青森間を同社汽船は161往復した（日本経営史研究所編（1988、257、488頁））。また大阪商船会社・日本郵船会社の定期汽船航路については中西（2016、第7章）を参照。なお、1885年を100とする指数でみると、函館港の移出額は90年224.8、1900年449.6、10年811.8、函館港の移入額は90年192.1、1900年436.8、10年630.8となった（函館市史編さん室編（1990、686頁））。函館の人口は、函館市史編さん室編（1990、520、547頁）を参照。
 - 16) 「東北諸港報告書」（商品流通史研究会編、1979a）319-321頁を参照。
 - 17) 同上、321、334-340頁を参照。
 - 18) 『野辺地町郷土史資料』（野辺地町立歴史民俗資料館蔵）512頁を参照。
 - 19) 上北郡での軍馬政策については、大瀧（2013）を参照。
 - 20) 中西（2006、125頁）の表3-2を参照。
 - 21) 明治17年～「〔勘定目録〕」（野坂勘左衛門家文書、野辺地町立歴史民俗資料館蔵）より。
 - 22) 北海道産魚肥生産の動向は、中西（1998）を参照。
 - 23) 明治17年～「所得金高届」（野坂常吉家文書、野辺地町立歴史民俗資料館蔵）より。
 - 24) 明治22年「御用留」・明治23年「願届諸用留」（いずれも野坂常吉家文書、野辺地町立歴史民俗資料館蔵）を参照。
 - 25) 以下の記述は、中西（1998）を参照。
 - 26) 明治31年版「日本全国商工人名録」（渋谷編、1995c）を参照。
 - 27) 例えば、増田清七は歌棄郡の有力漁家であった（明治21年「歌棄郡鯨鮭建網場実測図」（北海道蔵））。
 - 28) 佐藤家の概略については、「先代履歴書」（佐藤家文書、石橋家蔵）および中西（1998）第4、7章を参照。石橋家蔵の佐藤家文書については複製を北海道立文書館で閲覧。
 - 29) 明治14～18・21・23年「大福帳」（佐藤家文書、北海道大学附属図書館蔵）を参照。
 - 30) 以下の記述は、文久2年「荷物惣請払帳」・慶応4年「二八帳」、明治14～18年「大福帳」（以上、佐藤家文書、北海道大学附属図書館蔵）、および明治9年「磯谷・歌棄郡各村漁場調」（北海道立文書館蔵）を参照。
 - 31) 前掲明治21年「歌棄郡鯨鮭建網場実測図」、明治34年「歌棄沿岸各漁場実測表」（佐藤家文書、石橋家蔵）を参照。建網場とは、定置網を海中に設置するポイントで、これを1カ所経営すると

- 20名ほどの雇漁夫を雇った操業となるため、建網経営を行ったかどうかが有力漁家を判断する1つの基準となる（北水協会編（1977））。
- 32) 「履歴書」（佐藤家文書，石橋家蔵）を参照。
- 33) 同上を参照。
- 34) 前掲明治17年～「〔勘定目録〕」（野坂勘左衛門家文書）を参照。
- 35) 前掲明治40年「鉄道局年報」附録：全国鉄道開業明細表を参照。
- 36) 廣海家の北海道での直接買付については，伊藤（2006）を参照。
- 37) 前掲明治17年～「〔勘定目録〕」（野坂勘左衛門家文書）を参照。
- 38) 「船舶売渡証（写）」，明治27年「万買帳」（いずれも廣海家文書，廣海家蔵，貝塚市教育委員会保管）を参照。
- 39) 廣海家の北海道直接買付の展開については，伊藤（2006）・中西（2006）を参照。
- 40) 明治31年版「日本全国商工人名録」によると，菅原治郎吉は営業税額56円の米穀海産物商，能戸豊吉は営業税額約38円の米穀肥料商，石垣秀助は営業税額約34円の酒醤油商として挙げられ，酒谷支店は石川県橋立の北前船主酒谷家の函館支店であった（渋谷編，1995c，中西（2009）第2章）。
- 41) 以下の記述は，函館市史編さん室編（1990，1097-1098頁）を参照。
- 42) 明治31年版「日本全国商工人名録」では，北海道の味噌醤油醸造家として，札幌の対馬嘉三郎（営業税額約63円）・後藤半七（営業税額約35円）や函館の佐野定七が挙げられた（渋谷編，1995c）。前述のように1887年時点で函館への移入醤油の2割強を千葉県巨大醸造家の茂木佐平治家（亀甲萬）や濱口儀兵衛家（ヤマサ）のものが占めており，1900年以降，函館商業会議所の物価調査で，亀甲萬，上ヤマサ，越後醤油と並んで佐野定七家製造の醤油が挙げられるようになった（函館市史編さん室編（1990，1097頁）。茂木佐平治家・濱口儀兵衛家については，公益財団法人高梨本家監修（2016）および林玲子編（1990）を参照。
- 43) 明治33年「鉄道局年報」（野田・原田・青木編，1980）175頁を参照。
- 44) 同上，174-175頁を参照。
- 45) 同上，175頁を参照。
- 46) 同上，174-175頁を参照。
- 47) 野辺地町史編さん刊行委員会編（1997a）115-171頁を参照。換算比率は，醤油は野坂家文書，味噌は「東北諸港報告書」（商品流通史研究会編（1979a））323頁より。
- 48) 1902年度『日本船名録』（国立公文書館蔵）を参照。
- 49) 明治39年「鉄道局年報」（野田・原田・青木編，1981a）217頁を参照。
- 50) 明治39年「日本帝国港湾統計」（商品流通史研究会編，1978）518-519頁を参照。
- 51) 野辺地町史編さん刊行委員会編（1996b，381-382頁）を参照。
- 52) 明治39年度『青森県統計書』464-465頁を参照。
- 53) 1924年度の野辺地町の産額は，農産物約30万円，水産物約17万円，畜産物約13万円，林産物約11万円，工産物約37万円であり，工産物産額のうち酒類が約19万円で味噌が約12万円で醤油が約1万円であった（野辺地町史編さん刊行委員会編（1997b，378-379頁））。

参考文献

- 井奥成彦・谷本雅之編（2018）『豪農たちの近世・近代—19世紀南山城の社会と経済—』東京大学出版会。
- 石井寛治・中西聡編（2006）『産業化と商家経営—米穀肥料商廣海家の近世・近代—』名古屋大学出版会。
- 伊藤敏雄（2006）「産地直接買付における情報伝達と輸送」石井・中西編（2006）所収。
- 伊藤正男（2017）『伊藤家歴世』伊藤正男（私家版）。
- 大瀧真俊（2013）『軍馬と農民』（プリミエ・コレクション 39）京都大学学術出版会。
- 公益財団法人高梨本家監修・井奥成彦・中西聡編著『醤油醸造業と地域の工業化—高梨兵左衛門家の研究—』慶應義塾大学出版会。
- 小風秀雅（1995）『帝国主義下の日本海運—国際競争と対外自立—』山川出版社。
- 佐々木誠治（1961）『日本海運業の近代化—社外船発達史—』海文堂。
- 渋谷隆一編（1995a）『都道府県別資産家地主総覧』青森編，日本図書センター。
- 渋谷隆一編（1995b）『都道府県別資産家地主総覧』東北編，日本図書センター。
- 渋谷隆一編（1995c）『都道府県別資産家地主総覧』北海道編 2，日本図書センター。
- 商品流通史研究会編（1978）『近代日本商品流通史資料』第 9 巻，日本経済評論社。
- 商品流通史研究会編（1979a）『近代日本商品流通史資料』第 1 巻，日本経済評論社。
- 商品流通史研究会編（1979b）『近代日本商品流通史資料』第 3 巻，日本経済評論社。
- 谷本雅之（2006）「廻船問屋廣海家の商業業務」石井・中西編（2006）所収。
- 中西聡（1995）「国内海運網の近代化と流通構造の変容」石井謙治編『日本海事史の諸問題 海運編』文献出版，所収。
- 中西聡（1998）『近世・近代日本の市場構造—「松前鯉」肥料取引の研究—』東京大学出版会。
- 中西聡（2006）「商業経営と不動産経営」石井・中西編（2006）所収。
- 中西聡（2009）『海の富豪の資本主義—北前船と日本の産業化—』名古屋大学出版会。
- 中西聡（2016）『旅文化と物流—近代日本の輸送体系と空間認識—』日本経済評論社。
- 中西聡（2019）『資産家資本主義の生成—近代日本の資本市場と金融—』慶應義塾大学出版会。
- 永峰文男（2000）『野坂常吉家文書—仕切状目録—』（私家版）。
- 日本経営史研究所編（1988）『近代日本海運生成史料』日本郵船株式会社。
- 日本国有鉄道編（1997）『日本国有鉄道百年史・年表』成山堂書店。
- 野田正穂・原田勝正・青木栄一編（1980）『明治期鉄道史資料』第 I 期第 1 集第 6 巻，日本経済評論社。
- 野田正穂・原田勝正・青木栄一編（1981a）『明治期鉄道史資料』第 I 期第 1 集第 11 巻，日本経済評論社。
- 野田正穂・原田勝正・青木栄一編（1981b）『明治期鉄道史資料』第 I 期第 1 集第 12 巻，日本経済評論社。
- 野辺地町史編さん刊行委員会編（1992a）『野辺地町史』資料編第 6 集，野辺地町。
- 野辺地町史編さん刊行委員会編（1992b）『野辺地町史』資料編第 7 集，野辺地町。
- 野辺地町史編さん刊行委員会編（1993）『野辺地町史』資料編第 9 集，野辺地町。
- 野辺地町史編さん刊行委員会編（1995）『野辺地町史』資料編第 15 集，野辺地町。

野辺地町史編さん刊行委員会編（1996a）『野辺地町史』資料編第16集，野辺地町。
野辺地町史編さん刊行委員会編（1996b）『野辺地町史』通説編第1巻，野辺地町。
野辺地町史編さん刊行委員会編（1997a）『野辺地町史』資料編第18集，野辺地町。
野辺地町史編さん刊行委員会編（1997b）『野辺地町史』通説編第2巻，野辺地町。
野村勉四郎（1997）『回想八十六年—私の歩んだ道—』自費出版。
函館市史編さん室編（1990）『函館市史』通説編第2巻，函館市。
林玲子編（1990）『醤油醸造業史の研究』吉川弘文館。
北水協会編（1977）『北海道漁業志稿』国書刊行会。
牧野隆信（1989）『北前船の研究』法政大学出版局。
萬代悠（2021）「畿内豪農の『家』経営と政治的役割」『歴史学研究』第1007号。
宮澤秀男（2014）『野辺地町 歴史の源流を探る』（私家版）。
宮良高弘編（1990）『青森県上北郡野辺地町野辺地の社会と民俗』（北海道を探る20）青森県上北郡
野辺地町・北海道みんぞく文化研究会。
由井常彦・浅野俊光編（1988～89）『日本全国諸会社役員録』全16巻，柏書房。

投 稿 日：2020 年 10 月 23 日

掲載決定日：2021 年 3 月 15 日

Transformation of Distribution Structure and Shipping Business Persons in the
Meiji Era of Japan
The Cases of Nosaka Family and Shirogane Family

Satoru Nakanishi

This paper discusses how sailboat carriers managed at the Noheji Port in Aomori Prefecture, which was a base port for distant transportation in the early modern period, after sailboat transportation between distant areas was replaced by steamship transportation. Since Noheji was not a port for regular steamers, connections with remote markets weakened as a result of the development of the regular steamship network, and although the size of the port relatively decreased. But the Noheji Port was linked to the expansion of the market in Hokkaido on the opposite shore, and it became a base of the underground transportation network centering on small steamships while taking advantage of the opening of the railway. The shipping industry in Noheji Port was flexible in dealing with the development of the Noheji economy; for example, the Nosaka family had the branch family carry out soy sauce and miso brewing in the modern times, which organically linked the expansion of fish fertilizer production in Hokkaido with the expansion of miso and soy sauce brewing in the Noheji region. The Shirogane family also developed a new transportation route by sailing ships repeatedly between Hokkaido and Noheji, and contributed greatly to the formation of the underground transportation network. The development of the management of the shipping business persons in Noheji provided a major impetus for fluidizing the distribution system of fish fertilizer in Hokkaido and transforming the structure of the Hokkaido fishing industry.

